

〈論文〉

近代初頭に至るまでの日本文芸における「猫」

劉 金 挙・夏 晶 晶

I 「猫」の歴史と文芸作品における「猫」のとらえ方

猫が人間と関わりを持つようになったのは、およそ五千年前の古代エジプト人が、大切な農作物を鼠の害から防ぐために、アフリカのリビア地方の山猫を飼い慣らしたことに遡る。かつて古代エジプト人は、猫を聖獣として崇拜し、国外への持ち出しを厳禁していた。その後、菌を媒介する鼠を退治し、当時の人間を死の恐怖から救った猫は、猫神信仰——猫の頭で表わされ、夜の間、太陽神に代わって月神の役割を果たす女神「バステト」——として神格化されて崇められ、世界中に広がり飼われるようになったのだ、とされている。時代の変遷に従い、「魔女伝説」のせいもあり、猫には「受難」の時期も一時あった。だが、エジプトの女神と縁があることもあり、その柔らかくて淑やかで暖かい身体、可愛らしい仕草、わがままな性格などの女性的イメージを有する愛玩動物として、猫は人気を高めてきたのである。

日本においては、長い歴史上、宮廷をはじめとした上流社会に寵愛された「唐猫」もいれば、民間において人間に大きな害をもたらした「猫又」と「化け猫」や、現世的な利益をもたらす「招き猫」と「猫檀家」などもある。「現在、我が国の文化は猫的である。それは誰でも知っている」¹⁾ほど、人気の愛玩動物としての猫は、猫神社で祭られたり伝説で物語られたりするのに留まらず、雑誌などで「猫」特集という特別版まで発行されている。このことに示されているように、「猫」は、文芸世界において重要な位置を占め、研究対象としても注目を集めている²⁾。また、猫を「主人公」にしたアニメーションやそのキャ

1) 中西裕 [1987]「日本『猫』文学史序説 (一)」『日本文学誌要』第37巻, p76。

2) 雑誌には、『ユイリカ』1973年11月号と2010年11号、『国文学』1982年9月号などがあり、書物には、石田孫太郎著『猫』(求光閣 1910)、大木棹著『猫の民俗学』(田畑書店 1975)、柳瀬尚紀編訳『猫文学大全』(大和書房 1980)、仁賀克雄編訳『猫に関する恐怖小説』(徳間書店 1980)、中島河太郎編『猫が見ていた』(廣済堂出版 1981)、平岩米吉著『猫の歴史と奇話』(築地書館 1992)、熊井明子著『猫の文学散歩』(朝日文庫 1995)、堀江珠喜著『猫の比較文学』(ミネルヴァ書房 1996)、田中貴子著『猫の古典文学誌 鈴の音が聞こえる』(講談社学術文庫 2014) などがある。

クターとしての「ドラえもん」などの商品開発に成功し、全世界に日本のことを発信するのに役立っている。

振り返れば、奈良時代、そもそも仏教の伝播に伴い、経典などを鼠の害から守るために、中国から（直接、乃至は朝鮮半島経由で）日本に伝わったとされる「猫」は、仏教的色彩やそれによる神秘性などに強く染められていたとともに、「唐風文化」の強い影響も受けていながらも、独自の特色がある「猫」文化を形成するに至ったものである。その後、近代に入るのを境にして、そのイメージが、仏教的色彩・神秘的色彩がまといつく中国の「猫」文化に影響されたものから、西洋文化の影響による娼婦型の女性・謎解きの担い手・現世的な利益をもたらす吉なもの、というイメージに変わり、更にはアイドル化されるに至るのである。

「文学のなかに登場する猫は、ほとんどの場合、寓意や隠喩、換喩でしかないよう」である。本稿は、「猫」の歴史を振り返りつつ、「猫の本質ではなく、猫にまつわる伝統と言説のなかで」、近代初頭に至るまでの「文学のなかに登場」する日本の「猫」の「寓意や隠喩、換喩」³⁾のイメージを考察し、日本文化へのより深い理解を図ろうとするものである。

II 中国における「猫」とその影響

近代初頭にかけての日本文学における「猫」を見るには、まず中国文学における「猫」を見なければならぬのであろう。

古代中国では、「猫」は「狸」とも書き、早くも『詩経』や『礼記』などの文献に登場している。猫は農業を守る神として祭られてきたが、「猫を飼う風習が始まったのは前漢のころからで、唐代には犬や鶏と並んで大切な家畜として家々に飼われるようにな」⁴⁾り、「収獲物に害を与える鼠を捕食することが重視され、少なくとも唐までは愛玩の対象としては詠じられていない」⁵⁾との指摘通り、長い間、殊に供物や経巻書画などが多くある社寺や知識人の家で多く飼われていた。南宋時代の陸遊（1125～1210）は、貧乏生活に苛まれていながらも、「塩を褰み迎え得たり小狸奴、^つ尽く護る山房万巻の書を。^{せうりど ことごと}慙愧す家貧くして策勲の薄きを、寒に氈の坐する無く食に魚無し」（「贈猫」）とあるように、貴重な書物を護らせるものとして、高価な塩と交換に子猫を手に入れている。これは正に当時の知識人にとっての「猫」の価値・使い道の活写であらう。

3) ダリン・テネフ著・南谷奉良訳 [2015] 「猫、眼差し、そして死」『人文学報・フランス文学』第511号、p118, p115。

4) 岡田章雄 [1980] 『犬と猫』毎日新聞社。（後藤秋正 [2007], p2）。

5) 後藤秋正 [2007] 「猫と漢詩札」『北海道教育大学紀要』第57巻2号、p12。

が、古代中国では、「猫」は、エジプトや西洋における「猫」の大人気に影響された記録はない。また、伝来が遅かったせいもあろうか、知識人に大歓迎されながらも、「十二支」⁶⁾には入っておらず、文学作品への登場はあるにはあるが、全体的に言えば少ない。

また、古代の中国では、「猫」は、「狸（狸）の属なり」、家猫が「狸奴」と呼ばれることが示しているように、不気味さのある獣とされていた。しかも、^ね子の日に猫を用いる^ふ巫蠱の法もあり、その魔性が強調され⁷⁾、基本的にいえば、「猫妖」や「猫鬼」というマイナスのイメージの伝説に纏いつかれていた。そのイメージの確立は、隋・唐の時代だと思われ、中でももっとも影響が大きいのは、「猫鬼」を呪詛に用い、人の財産を狙い、それを着用したことを記録した『隋書』（621～629）の「列伝 第四十四 外戚」（卷七九）所収の「独孤陀」であろう。このことに関しては、司馬光著の『資治通鑑』（1066～1084）の「高祖文皇帝上之下 開皇十八年」（卷一七八）という項に記載がある他、「猫鬼」の飼育者や飼育法を伝授する人を絞首刑に、そして摘発しなかったり糾さなかったりする人を流刑にするという法的措置を定めた『唐律疏義』（652）の「賊盜律二」（卷一八）や、「猫鬼」の飼育が追及され殺戮された家族が数千にも及んだという取締りの実態を描いた『太平広記』（977～978）所収の「猫鬼」（卷一三九）などがある。かの清・李時珍の大著である『本草綱目』（1552～1578）にも、「猫鬼」に崇られた際の治療法が記載されている。

「猫妖」のことを最も多く収録したのは、従来の「猫妖」や「猫鬼」などの伝説を集大成した清・黄漢が編集した『猫苑』（1853）であろう。中には、月の精華を取り入れ修行し、人間にも化けることのできる「金華猫」の記録もあれば、「猫鬼」に崇られた人に鹿の角の粉を飲ませることによってそれを退治したという記録もある。清・納蘭性徳（1655～1685）著『淶水亭雜識」、清・袁枚（1716～1798）著『子不語』（1788）所収の「猫妖」と『続子不語』所収の「綠郎紅娘」なども、「金華猫」に関して記録しそれを裏付けている。

残酷な女性のイメージと絡んだもっとも典型的な例は、則天武后（624～705）のことであろう。則天は、自分の地位を固めるために、元皇后の王氏と元妃の蕭氏の四肢を切断したうえで、酒壺に投げ込ませた。蕭氏は死ぬ前、自分は猫に転生し、鼠に生まれ変わった則天の喉笛に食らいついて殺してやると呪った。そのことを危惧した則天は宮中で猫飼いを厳しく禁じたうえで、長安にではなく、「東都」の洛陽によく滞在し暮らしていたと言われている⁸⁾。このことから、当時において「猫鬼」はいかに怖いものとされていた

6) 中国では、秦の時代に既に「十二支」の考えがあったようだが、現存史料の中で、今日と同じ内容の「十二支」に関する記録は、前漢時代の王充『論衡』（86）に遡る。

7) 白川静 [1996] 『字通』 平凡社、p346。

8) 『大唐新語』、『太平御覽』、『唐書』、『旧唐書』、『新唐書』、『資治通鑑』などに、このことが記録されている。

かが伺える。

則天武後に纏わるこのことは、後に日本に伝わり、『源氏物語』(1004～1012)に影響を与えたりし、更に「唐ノ則天皇后ノ事」という題で、『礪石集』(1693)に収録され、後に見る日本の政治的・社会的なテーマの「有馬の猫騒動」(1728)などにも影響を与えたりと推測されている。

更に、確かな記録はないようであるが、猫に近寄られたら、死んだ人が大暴れをしてしまうという伝説が中国各地にある。亡くなった人の遺体には、魂がまだ宿っており、それだけに蘇生しようとする意欲が強い。したがって、もしその場に猫がいたら、死者の魂が「九生」もある猫から命を借りようとするゆえ、大暴れしてしまうのだ、というのである。

ほかに、猫が僵屍と関係づけられた次のような伝説もある。室内の木板の上に横たえられた遺体が、夜間に猫に飛び越えられたところ、たちまち僵屍に変じ、板の上から這い出して裏口から出ていった。その後、この家の鶏や鴨がよくいなくなるようになった。ある日、一人の老和尚が訪れ、鶏などは実は僵屍に取って食われたのだと教える。その晩、和尚は燭を点じ、帚を手にして一人で室に坐して僵屍を待ち伏せる。夜半に僵屍が現れ、和尚に跳びかかると、和尚は身を躲して帚を投げつけ、これを滅ぼしたという。このような伝説が、中国の長江流域に流布していた⁹⁾。

このように、近代以前の中国の「猫」は、鼠を捕食するという実用性が貴ばれていたが、伝統文芸において、神秘性、不思議な魔性と冷酷さなどを持つ血も涙もない化け物、祟り物である、というマイナスのイメージが強い。¹⁰⁾ これは、日本に影響を与えたりとされている。

しかし、近代以降、西洋文化と日本文化、乃至は日本経由の西洋文化の影響で、中国の猫文化も段々と世界的な「バージョン」に変わり、「黒猫警長」¹¹⁾などのアニメが示しているように、「猫」を肯定的にとらえる文芸作品も出てきたし、ペットとしての人気も高くなりつつある。

9) 鄭幸生 [1933]『中国民間伝説集』上海普通書局、pp. 48～50。

10) 付婷 [2012]「武則天“畏猫説”再探」『唐史論叢』第15輯。

11) 『黒猫警長』は、作家の諸志諒が、1981年9月創作に取りかかった童話で、1982年2月福建少年児童出版社により出版され、1985～1991年、『动画大王』誌により漫画に改作され、単行本として五集出版され、大きな人気を呼んだ。それを受け継ぎ、監督の戴鉄郎は、1984年にアニメ化して五巻公演し、2010年更に映画化した。1980年代に幼年時代を過ごした児童の間で最も人気の高いもので、黒猫警長も「中国アニメ史上最ルークな警長」としてイメージされている。

Ⅲ 近代初頭に至るまでの日本の「猫」

『宇多天皇御日記』の八八九年二月六日付けの部分は、貴族の間において、気高いイメージで、富のシンボルとして愛玩されていた「唐猫」の存在を記録した最古の文献であろう。ここでは、非常に優雅で、しかも卓越した鼠捕の能力を持っているゆえ、毎日乳粥を与えて飼育されていたという猫が描かれている。また、『枕草子』（996）第六段「上にさぶらふ御猫」は、愛猫家である一条天皇と定子が、随時昇殿させるために「命婦のおとど」（五位以上の女官）と名付け位階まで授けた愛猫を、それから、藤原実資が記した『小右記』の九九九年九月一九日付けの部分は、五位の地位を授けられ、馬の命婦という乳母まで付けられた猫を描いている。¹²⁾ したがって、当初、猫は鼠捕という能力が重んじられ、平安時代に入り、愛玩動物としても飼われるようになったが、貴族の間に限ったものである、ということが推測できよう。後に、「飼い猫は室町時代以後に普及し江戸期になるとさらに普及し一般庶民の間で犬や猫が飼われるようになり、近代に入るとさらに一般化してゆく」¹³⁾ のである。

文芸作品における「猫」は、次のようなイメージが強い。

1. 仏教的色彩

猫が初めて文献に登場するのは、平安前期の仏教説話集『日本霊異記』（810～824）の上巻第三十話で、七〇五年に豊前国の膳臣広国が、死後、猫（原文では「狸」と標記）に転生し、息子に飼われた、という「非理に他のものを奪ひ、悪行を為し、報を受けて奇しき事を示した縁」である。

もっとも代表的なものは、『源氏物語』であろう。「若菜上」「若菜下」における「唐猫」は、女三の宮に対して制御の効かぬ恋情を柏木に抱かせる発端となる。後には女三の宮の形代となって、更には懐妊の予兆として夢にまで現れる。殊に、柏木は、密通というタブーを犯してしまったことに呆然自失の態に陥った女三の宮に、これも前世からの宿縁と思ってほしいと告げたうえで、猫が暖簾を引き開けた話を聞かせ、彼女を説得した¹⁴⁾。即ち、ここでは、「猫」は「宿世」として二人の前に立ち現れたわけである。それから、これと関連して、女三の宮を襲う六条御息所の怨霊の悪魔性にも、仏教の因縁思想の影が色濃く反

12) 宮崎荘平 [1982]「王朝文学に猫を見た」『国文学 解釈と教材の研究』第27巻12号。

13) 三浦正雄 [2011]「黙阿弥の怪談と怪異、明治維新以後の変遷——日本近現代怪談文学史5——」『埼玉学園大学紀要（人間学部篇）』第11号, p74。

14) 「猫は『恋しい女性との間を隔てる遮蔽物を引き開ける動物』だというイメージが、『源氏』の文学史上の大きさを背景に出来上がった。そのイメージのもとでできたものに、『狹衣物語』や『猿源氏草子』などが挙げられる。詳しくは、中西裕 [1987] 参照。

映されている。

更に、『更級日記』(1059)においては、姉妹二人に飼われるようになった迷い猫は、姉が見た夢では侍従大納言(藤原行成)の姫君が転生したもので、その後、火事によって焼死してしまう。因縁深いことに、「姉にとっての『転生』は単なるロマンではなく、愛の深さ、すなわち心深さの象徴であり」、「そのあとに続く転生した猫の死は、あたかも物語世界に描かれる『心深さ』が夢幻であったことを知らしめるかのよう」¹⁵⁾に、姉はその後、子を産んで亡くなるのである。

つまり、日本に伝わった当初から、「仏教の番人」即ち仏法の守護者というイメージが強かった猫は、『源氏物語』では「因縁」を、『更級日記』では「転生」という仏教的な観念を表象している。このことが表すように、中古の文学では、猫と仏教は親しい関係にあったのである¹⁶⁾。

平安時代から近世に続く「火車」と「猫檀家」も、仏教の影響のもとでできたものである。火車とは、もともと仏教で地獄に落ちる人を連れて行く火の車である。『大智度論』巻十四に、仏の足指を傷つけた提婆達多がまだ王舎城に着かないうちに「地自然破裂。火車來迎。生入地獄」とあるように、古代中国には、生きながら火車に迎えられ地獄に落ちるという伝説があった。それに対し、『日本往生極楽記』(第十九話)や『今昔物語集』(巻十五第四話)などのような往生伝や説話集には、念仏の力で火車は去って極楽の迎えが来るといふ話が多い。

悪人の臨終に現れるこのような伝統的な火車の説話が近世まで続いていたが、仏教の世俗化が進むにつれ、中世末か近世初期になると、

ある所に位のあまり高くない僧が一人で住んでいて一匹の猫を大変可愛がって飼っていた。しかし、だんだん僧は貧乏になって、可愛い猫さえ飼う事が出来なくなったので、(中略)猫はしばらく悲しそうにしていたが「それでは私も無理にいても仕方がないからどこかへ行きますが、一つ御恩返しをしたいと思います。もう少しすると、今病気で寝ている庄屋さんの所のおばあさんが死にます。そうすると、私はその葬式の日にかしゃになって、そのおばあさんをまき上げ、誰が祈っても、戻しませんが、あなたが祈ればすぐ降ろしますから」と言って、それきり姿を消してしまった。(中略)そのおばあさんの死体は、するすると空へ上って行った。さあ大変と大騒ぎになり、色々位の高い僧が幾人もで祈ったけれども少しも下りて来そうな様子がなかった。致

15) 大槻福子 [2013] 『『更級日記』の構成意識』『立命館文学』第630巻, p92, p93。

16) 中西裕前掲論文: 注1), pp. 75 - 87。

し方なく、位は高くなくてもと言って、例の僧が祈ると、不思議や、死体はするすると下りて来て元通りに棺の中へ納まった。それからその僧の評判は一時に高まり、大いに出世したという。¹⁷⁾

と、「猫火車」への理解にも報恩譚としての「猫檀家」¹⁸⁾への理解にも役立つゆえ、長いながらも、引用させていただいているこの伝説が語っているように、十七世紀末頃から十八世紀初頭には、「猫」は仏教から離れて独自の妖怪、言い換えれば火車の正体として歩み始め、死体をさらう妖怪・魔物に様変わりした。しかも、その後、対象にされた死者は悪人に限らなくなった。

それから、いろいろなパターンがあるけれども、最も典型的な「猫檀家」話は、上述したように、貧乏寺を繁昌させるために、和尚と仕組んで一芝居を打ち、葬送のさなかに死体を奪おうとする火車を阻止する「結託型」¹⁹⁾の報恩譚であろう。

2. 善・悪両方とも解釈されうる猫の神秘性

仏教や中国の伝説に由来する猫の神秘性は、善・悪のどちらにも解釈できるのであろう。まず善のほうについて説明する。

日本において、長い間、猫は、鼠退治の聖獣・穀物霊として貴ばれてきた。例えば、江戸時代の『宿直草』（1677）には、「人を喰う鼠」に対抗する猫のことが描かれている。民間では、本物の猫が貴重で高価であるゆえ、鼠を駆除するための呪具として、猫絵を描いて養蚕農家に売り歩く者もいた。そこから、絵に描かれた猫が古寺で大鼠に襲われた主人の命を救う「猫寺」という説話もできた。また、猫が人々を病から救う「猫薬師」などの伝説もある。これらの話が示すように、猫は鼠捕という特質の代わりに、いつしか人間に現世的な利益をもたらすものだとされるようになったのである。

更に、江戸時代に入り、人間のような行動をとる「猫の踊り」という伝説が生まれ、人間への恩返し、もしくは人間の願い事を叶えるために人間に化けたり「結託」したりする「猫檀家」「伊勢参りの猫」などの伝説が各地に広がり、恋文を啜えて彼氏のところへ届け猫を描く柳亭種彦『修紫田舎源氏』（1829～1842）なども登場した。

また、目に見える実益をもたらすだけでなく、人間が猫から有益なものを学ぶという話

17) 静岡県女子師範学校郷土研究会 [1994]『新版 静岡県伝説昔話集』羽衣出版, pp. 98 - 99.

18) 関敬吾編 [1978]『日本昔話大成 6 本格昔話五』（角川書店, pp. 62 - 57), 福田晃 [1976]『昔話の伝播』（弘文堂, pp. 104 - 105), 山田巖子 [2005]「火車説話の受容と展開」（堤邦彦・徳田和夫編『寺社縁起の文化学』森話社）などが挙げられる。

19) 勝田至 [2013]「火車の誕生」『国立歴史民俗博物館研究報告』第174集, p20.

もある。江戸時代の老荘思想に関する啓蒙書『田舎莊子』(1727)所収の「猫の妙術」では、とんでもなく怪物めいた鼠に、「わざ」に長じた黒猫、「気」を練り続けた虎猫、それから「心」の修養を長年こなしてきた猫が挑戦するが、いずれも無残に負かされてしまう。それに対して、暇さえあれば寝ているような古猫がいつも簡単にそれを捕らえてしまう。結論として、「わざ」や「気」や「心」の修練は必須であるが、「をのれを忘れて、物を忘れて、無物に帰す」ことこそ一番偉いと、猫から剣の極意を悟らせるという風変わりな物語である。

次に、悪のほうについて説明する。

「猫に九生あり」、「猫を殺せば七代祟る」、「猫の逆憎み」、「猫は死人を飛び越すと死人が立つ」、「猫を一匹殺せば七堂伽藍を建立したるより功德あり」などと言われているように、日本では、身近にいる「猫」は、魔性を感じさせ、片意地で執念深いものとみなされる傾向があった。その代表的なものとして、猫又、山猫、妖猫、猫鬼といった化け物が挙げられる。

猫を恐怖の対象として描いた最も古いものとしては、『今昔物語』本朝世俗部の巻二十八「大蔵大夫藤原清廉怖猫語第三十一」(「前世は鼠にてや有りけむ」清廉が無類の猫嫌いである)がある。そこから、一晩で数人を食い殺した「猫勝」^{ねこまた}を記録した『名月記』(1180～1235)、人間を噛み付く「山猫」や「猫狗」を記録した『本朝世紀』(1150年から創作開始)と『百鍊抄』(鎌倉末成立)、嵯峨の山荘で飼われた猫が猫又に変身して秘蔵の守り刀を銜えて山中へ逃げ出したことを収録した『古今著聞集』(1254)、「奥山に、猫またといふものありて人を食ふなる」という噂を記した『徒然草』(1330～1331)、「猫またの事」と「老女を獵師が射たる事」を収録した『曾呂利物語』(1663)、「ねこまたといふ事」を収録した『宿直草』、「猫妖テ人ヲ害スル事」「猫種々ニ妖テ人ヲ害セル事」「猫火車ト成テ人ノ死骸ヲトル事」などを事実談抜いで収録した『礦石集』、「石河又太夫、猫またを半弓にて殺す事」を収録した『因幡怪談集』(1750)、「猫の人に化けし事」「猫人に付す事」を収録した『耳袋』(1814)などを経て、『南総里見八犬伝』(1814～1842)に描かれている庚申山妖猫にまで脈々とつながっていくのである。

これらの作品中では、猫が人を食ったり暴れたりする邪悪なものとして描かれているのが特徴である。例えば、『南総里見八犬伝』における庚申山妖猫は、虎のような面相に、耳まで裂けた真っ赤な口と、剣のような鋭い牙をした化け物で、犬士の一人である犬村大角の父・赤岩一角を食い殺し、彼に成り代わって悪事を働く。

その後、「江戸期後半になるとお家騒動や直訴などの政治的・社会的なテーマと結びついた化猫が登場する。中でも、通称『岡崎の猫』『鍋島の猫』『有馬の猫』と呼ばれる三大

化猫譚が特に有名である」。²⁰⁾ここでは「有馬の猫騒動」を例として挙げておく。

一七二八年に久留米有馬藩で起きた一揆と世継ぎ問題によるお家騒動に伴って巷間に流布したこの化猫話は、有馬家の愛妾であるお槿をめぐる展開される物語である。お槿は、他の妻妾及びその女中らの嫉妬により非業の死を遂げる。しかし、お槿の愛猫が、お槿の女中お仲に憑依して主人を死に追いやった人達に復讐し、更には、有馬家にも祟るようになってゆくというものである。この話を基礎として作られた桃川如燕の講談が、後に文章体の『高槽力士旧猫伝』(1885)と速記本の『小野川真实録』(1893)として書籍化された。さらに、黙阿弥が桃川の講談をもとに「有松染相撲浴衣」(東京猿若座 1880)として歌舞伎化もしている。

群馬県、愛知県日間賀島、徳島県祖谷山には、「死人をさらうカシャとは、正体は年古くなった虎猫だ」²¹⁾、「カシャの魂が仏に入ると仏が立って歩く」²²⁾とあるように、猫に飛び越えられたら遺体が動き出すという俗信があった。それを背景に、魔除けのために遺体の上に刃物を置く民俗が生まれた。ここにも、「猫」の怖さや邪悪が見られる。

3. 女性のイメージとしての「猫」

前にも見てきた『源氏物語』や、その影響を受けた『更級日記』などの古典にも、「老女を獵師が射たる事」などの民話にも、「猫」は女性、乃至は女性的なものとして描かれている。中でも、代表的なものは、前に見た『源氏物語』の「若菜上」「若菜下」における猫であろう。

特に、「唐猫は女三の宮の性的な要素を現し、柏木により高貴な女性の身代わりとして、官能的な存在として表象され」²³⁾、「自分にとって想い人の都合の悪いものを取り除いた、思い通りになる『理想的な想い人の形代』」²⁴⁾というイメージは、日本文学の中に脈々と続いている。その中には「女三の宮を襲う六条御息所の怨霊の悪魔性とも照応し、『悪魔や娼婦』『霊』など『憑き物』として表象されている」²⁵⁾傾向と「『身分が高く上品な女性』としての位置づけ」²⁶⁾という、一見矛盾した二つの傾向がある。

後に、「『猫』は江戸期における私娼の異名の一で、両国の金猫、銀猫、山の手山猫な

20) 三浦正雄前掲論文：注13)、p73。

21) 佐藤義則 [1980]『羽前小国郷の伝承』岩崎美術館、pp. 70 - 71。

22) 群馬県 [1982]『群馬県史 資料編2 6 民俗2』、p1235。

23) 朴庚卿 [2011]「猫の表象をめぐる日本と韓国の比較文化」『国際日本学論叢』第8号、p33。

24) 大辻翔子 [2009]「平安文学における猫」『緑聖文化』第9号、p51。

25) 朴庚卿前掲論文：注23)、p33。

26) 大辻翔子前掲論文：注24)、p50。

どの称もあった」²⁷⁾とあるように、「猫」を娼婦の異名にした社会通念ができ、仮名垣魯文は、明治十一年七月二十一日、中村楼で「珍猫百覧会」を開き、芸者を猫と呼んで新聞紙上にゴシップ記事を載せたりしたこともある。今日に至っても、「男をたぶらかす芸妓や娼婦」²⁸⁾を猫又と呼ぶことがある。

その影響もあろうか、「猫の瞳が明るさによって形を変える」ということから生まれた「猫の目のように」という、女の心の移り変わりが激しいことを比喩する表現や、「猫は傾城の生まれ変わり」という諺も現れ、「猫＝女・傾城・憑き物」というイメージが定着していったのである。

4. 「現実を反映させる」「猫」

『源氏物語』における柏木の「猫を返す夢」を例としてみよう。

「若菜上」「若菜下」において、柏木は、猫を見ることにより女を垣間見、更に猫を手に入れることにより女と密通関係を結ぶに至る、とあるように、柏木と女三の宮との関係において、猫は欠かせない働きをしている。だが、柏木が夢を見た後、猫の記述が一切なくなるし、彼が亡くなり、二度と女と会うことができなかったのである。

前に紹介したように、従来、この夢を女三の宮の妊娠の予兆ととらえる見方が多いようである。確かに、動物の夢を見て妊娠したという漢籍の影響や、物語の前に現れる光源氏の密通事件の時の夢などから、そのことは十分に考えられる。しかし、この夢を見た後、猫を返そうと思っていないのに、このような夢を見たのを不思議がっていることから、柏木は、猫も女三の宮も手放そうとは思っていなかったことが分かる。したがって、「ここから、『猫』の位置づけとして『現実を反映させる形代』として描かれている」²⁹⁾ことが推測できる。

この傾向は、江戸時代における、現世的利益をもたらす「猫」にはつながるのであろう。

5. 現世的な利益をもたらす「猫」

士農工商という厳しい身分制度に拘束された町人が遊びに粋や通を求める江戸時代に入り、歌舞伎や講談などにおいては、「猫」は、魔性（呪術性）を持つ「化け猫」という恐怖の対象である同時に、次に見ていくように、段々と現世的な利益をもたらすものにもなっ

27) 小池章太郎 [1998]「仮名垣魯文著『会席招猫』 解題・翻刻」『跡見学園女子大学国文学科報』第26号、pp. 113 - 114。

28) 『日本国語大辞典第二版』第一巻（小学館 2001）は、化け猫について、「人などに化ける猫また、その妖力を持つ猫。猫の妖怪」、それから、「男をたぶらかす芸妓や娼婦」、と説明している。

29) 大辻翔子前掲論文：注24)、p50。

ていく。

この時期の「猫と嫁子」「猫檀家」「伊勢参りの猫」³⁰⁾に至り、猫は人間に恩返しをするため、もしくは人間の願い事を叶えるために人間に化ける行動を見せるようになる。中でも代表的なものは、十六世紀後半にできた「豪徳寺で井伊直孝が猫に招かれる」という伝説に起源を持つ「招き猫」であろう。その伝説は以下のような話である。荒れ寺の和尚が飼っていた白猫が、恩返しのために、鷹狩りの帰りに通りかかった彦根藩主・井伊直孝に、道端で頻りに手招きをして寺に招いた。井伊藩主が入寺した直後、雷雨は降り出した。藩主が雨に降り込まれ寺から出られなくなるのをよいこととし、和尚は茶を出したりこの珍客に法話などをしたりして丁寧にもてなす。一方、これを不思議なご縁だと感じた藩主は、この貧窮寺を自分の菩提所にした。猫のお陰で、豪徳寺は栄えるようになる。

このように、この時期の「猫」は、「宮廷の愛玩動物としてのイメージと異なり、人間の力で解決できないことを叶えてくれる、人間に備えていない力を持つ存在として表象された。(中略)鼠退治、商売繁盛、遊女の恋など、その願いの反映が招き猫を多様化させ、客や金を招き、恋を叶わせてくれる招き猫が登場する」。「結局、人間に変身する妖力がある化け猫は日本人にとって恐怖の対象ではない、娯楽の対象、可愛らしいペットというイメージにつながっている。」³¹⁾

IV 近代以降の「猫」とのつながり

前に見てきたように、「世界各地で宗教的、神秘的事象と結び付けられている」³²⁾猫は、古代エジプトに源を持ち、農業を守る聖獣、猫神として神格化されたもので、後に仏教の伝播に伴い、中国から日本へは伝わったものである。そのため、近代初頭にかけて、日本における「猫」は、鼠捕という特性が貴ばれるほかに、仏教的色彩・神秘的色彩が付きまとっていた。

その時期までの「文学のなかに登場」し、「寓意や隠喩、換喩」をなした日本の「猫」は、仏教に由来する因縁・転生、それから、その神秘性に加え、獲物をなぶりものにする残酷なイメージと中国の「猫」文化の影響から、片意地で執念深いもの・残酷なもの、という一面も持っている、猫又伝説がその表れである。が、女性的一面を強調し、「現実を反映させる」という日本独自の「猫」文化をも形成している。これが、仏教が世俗化するにつれ、江戸時代に入り、猫の「人格化」と「神格化」が広く行われ、流行神となり、更に庶

30) 関敬吾編 [1978]『日本昔話大成 6 本格昔話五』角川書店。

31) 朴庚脚前掲論文：注 23), p38, p36。

32) 高橋秀治 [1987]『動植物ことわざ辞典』東京堂出版, p173。

民に楽しまれていた歌舞伎や講談などにおいて魔性（呪術性）を持つ「化け猫」や、人間に現世的な利益をもたらす「招き猫」と「猫檀家」に発展するに至る。言い換えれば、「猫」は恐怖の対象である同時に、人間に現世的な利益をもたらす吉なものとして、人間を楽しませる娯楽の対象にもなったのである。

別稿にて検討していくが、古代の日本における「猫」の上記の特徴は、近代に入ってから、西洋から伝わった「猫」の文化とうまく融和し、今日の日本の「猫」文化の根底をなしていると思える。以下では、四つの面から簡単に見るに留める。

第一は、女性的な一面である。

「ダンテやフランチェスコ・ペトラルカといった当時の詩人たちは、彼らが愛した女性を、自分には手の届かないほど離れていて、ほとんど理解することができない存在として描き出していた」³³⁾。「とりわけ気まぐれで、小動物をなぶりものにして遊ぶ猫に女のイメージが重ね合わされたとき、残酷なエロティシズムがうまれる。猫型ファムファタールにもてあそばれ、ついにははずたずたに引き裂かれ殺されるという幻想——十九世紀末に流行した『スフィンクス』のテーマこそその典型であり、サド・マゾヒスティックな願望を成就させる契機であった」³⁴⁾との指摘通り、日本の古典文学における「猫」の女性的イメージは、西洋の近代文学における「魔性」的な「猫」と女性とのアナロジーに見事に合致し、谷崎潤一郎の『痴人の愛』（1924）や「猫と庄造と二人のおんな」（1936）をはじめとする日本の近代文学作品に大いに結晶したのである。

第二は、「現実を反映させる」一面である。

この伝統は、近代文学に受け継がれ、萩原朔太郎の『青猫』（1923）と「猫町」（1935）、宮沢賢治の「どんぐりと山猫」（1924）や「注文の多い料理店」（1924）や「猫の事務所」（1926）などに実ったのであろう。

第三は、神秘さと不思議さである。

西洋では、探偵小説の元祖とみなされるポーの代表作「黒猫」（1843）以降、そもそも「悪魔の化身」と目されていた「猫」は、謎めいたものともみなされ、「神秘性を秘めながら人間のそばで暮らす猫は、人間の想像力を喚起してきた。そのはてに、人間は猫の摩訶不思議な物語を生みだすことになる」。³⁵⁾ 明治初期より、西洋文化の影響のもとで、怪談の創作者は、実体がなく心の病だと解釈された幽霊よりも、身近に飼われる実体的存在であり魔性を感じさせる猫の怪異を描くことに力を入れるようになり、後の日本の推理小説

33) ダリン・テネフ前掲論文：注3), p119。

34) 堀江珠喜 [1996]『猫の比較文学』ミネルヴァ書房, p1。

35) 北嶋広敏 [2010]『不思議猫の日本史』グラフ社。(三浦正雄 [2011], p74)。

や探偵小説やミステリー小説などに開花した。

第四は、現世的で娯楽的な一面である。

江戸時代より目立ってきたこの特徴こそ、今日に至って、猫を象り、現世的利益をもたらすキャラクターとして、「ドラえもん」や「ハローキティ」などが生まれ、殊に一九七〇年代からはアイドル化され、日本を物語るシンボルになったルーツであろう。

総じていえば、近代になってから、仏教思想の影響を払拭しようとするかのように、平安時代からの伝統と西洋文学の影響とが溶けこみ、娼婦型の女性や近代社会の象徴としての「猫」、従来の魔性や神秘さというイメージを生かしたミステリー小説などにおける「猫」、それから、女性的イメージを有する愛玩動物、更にアイドル、とあるように、「猫」は、人気が高まったのである。

参考文献

後藤秋正 [2007] 「猫と漢詩札」『北海道教育大学紀要』第57巻2号。

三浦正雄 [2011] 「黙阿弥の怪談と怪異、明治維新以後の変遷——日本近現代怪談文学史5——」『埼玉学園大学紀要（人間学部篇）』第11号。

【付記】本稿は、広東外語外貿大学「外国文学文化研究センター」客員研究助成金と浙江越秀外国语学院日本文学研究助成金の成果の一部である。